新人のソーシャルワーカーさんと先輩のチャイルドライフセラピストさん

今年8月に新規雇用となったソーシャルワーカーのブンミー君（写真の左側）をご紹介します。人生初めての仕事に就くことになったブンミー君ですが、その雇用に当たっては、私が日本にいたためリモート面接という形を取らざるを得ませんでした。とてもやさしい物腰と、「明日からでも働けます！」という意欲にピンとくるものがありました。実際、患者さんやご家族の立場に立って考え、対応する姿勢に、院内スタッフからは早くも高い評価が聞こえてきています。
写真に一緒に写っているのが、チャイルドセラピストのコクメング君（写真の右側）。彼の子供を惹きつける才能（いや、あれは生まれ持った本質でしょうね）はピカイチ。そんな才能をブンミー君にも感じ取ってもらいたく、一緒に行動をする時間を設けました。コクメング君からあふれ出る“Compassion”のオーラを上手に受け取ることができたブンミー君。これからがとても楽しみです。ソーシャルワーカーとしての知識と能力が彼の“Compassion”で、さらに生きたものになること間違いなしですね。

孤児院で健康教育

右の写真は、孤児院での健康教育風景です。ラオスには孤児院はあまりないのですが、ここは国が運営している孤児院です。その孤児院で疥癬（ダニによる皮膚感染症）が大発生していました。痒さのあまりかきむしってしまった部分から化膿し、入院が必要なほどの全身症状が出た子が来院したことで事態が判明。集団生活ではこのような感染症は一気に広がりますし、また全員が完治するのはとても大変です。使っているリネンやマット、洋服など全てを一気に洗濯して天日干しし、薬を塗って、全員が疥癬退治に全力を尽くさないと全滅できません。みんなの協力が必要なのですね。まずは孤児院へ行って、子供たちを集めて疥癬についてのお勉強です。写真を見て、お互いに髪の毛をごそごそチェック。意識の高まりには即効性がありましたよ！ 根治目指して、一致団結頑張ってもらいましょう！

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

ちっちゃい赤ちゃんが頑張ってます！

今年は1キロを下回るちっちゃな赤ちゃんが元気に退院していった嬉しい年でした。それも、これまでの最低体重を更新する子が次々と訪れました。ラーノイちゃん（写真左）は800g、そして、バンマオちゃん（写真右）はなんと600g！
日本でも1キロ以下の赤ちゃんには特別な注意を払いますが、日本の設備には到底及ばないラオスの環境で、スタッフの熱意が命を繋いだと実感します。早産や低体重で生まれた赤ちゃんには、発達上で継続的なフォローアップが必要です。週に1回オープンしている発達クリニックでの定期的なチェックやアウトリーチによる訪問看護で、成長を見守ります。

ラーノイちゃんは県外に住んでおり訪問看護ではフォローアップできないため、発達・障がい児クリニックで定期的に発育と発達をチェックしています。先日、クリニックのフォローアップに来ているラーノイちゃんを見つけました！ びっくりするほど元気で、離乳食を始めて順調に育っています。今のところ発達も問題がなく、スタッフも安心しています。最初は不安そうだったお母さんも、今はとても嬉しそうです。バンマオちゃんの住まいはルアンパバーン県内でしたので、退院後も訪問看護でフォローアップをしていましたが、10月にご両親と2人の兄姉と一緒にラオス南部の県へ引っ越してしまいました。そのため訪問の継続はできませんが、電話で様子を聞いて成長の確認をしています。 離乳食を始めて体重も増えているようです。
10月にはもう一人、700グラムの赤ちゃんが入院しました。まだ入院中ではありますが体重は順調に増えており、じきに退院も視野に入りそうです。こうしてちっちゃな赤ちゃんがすくすくと育つ姿を病院スタッフが継続的に見ることで、病院スタッフは命の尊さを強く感じるはず。自らの手で命を勝ち取った実感が喜びになり、毎日のモチベーションにつながるのだと思います。

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

カムヤイちゃんの成長

昨年からこの出来事でも何回かご報告しているカムヤイちゃんですが、今でも定期的に外来で診察を受けて異常がないかを確認しています。カムヤイちゃんは“乳び胸”を患っていました。母乳や普通の粉ミルクのように脂肪のあるミルクを摂取すると、胸に水が溜まってしまう病気です。ラオスでは入手困難な特別なミルクが必要でしたが、日本のある方からのご厚意でそのミルクを支援していただけることになりました。半年後からは脂肪を含む食品を抜いた離乳食を少しずつ始め、今では普通のご飯を食べられるようになりました。ミルクのご支援は約1年続きました。その方に出会えた時にはほんとに嬉しかったです！
また、長期の入院生活ののち、退院のめどが立った時にはみんなでホ～っと胸をなでおろしたものでしたが、まだ引き続きの観察が必要でしたし、100%安堵の気持ちにはなれずにいたのを思い出します。そして、アッという間に1年半を迎えます。こんなに大きくなって、やんちゃさんになりました。動画もあるのですが、皆さんにお見せできないのが残念です。お母さんもホッとしていることと思います。それにしても、この笑顔！たまらないですね！カムヤイちゃんの人生の一部にほんの少しでも関われたことを嬉しく思います。そして、これからも元気に育ってくれることを切に願います。

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

日本国内では

今年のコロナ感染拡大は、世界中の人々にいろんな形で影響を及ぼしました。2次的、3次的な広がりも感じています。

ラオスでは10月に行う予定だった大きなチャリティマラソンイベントが中止になり、コミュニティからのサポートは0に等しい状況です。日本国内においても状況は同様で、予定していたチャリティイベントは全て中止となり、病院運営のサポートが危機に直面する事態に陥りました。そこで急遽、予定していなかったクラウドファンディングを行うことを決め、1か月間、告知、現地報告、オンライントークなど手を尽くして訴え、たくさんの方にご支援いただいたことでゴール達成を遂げることができました。

クラウドファンディングで伝えたかったのは、ラオスの現実です。コロナの感染者数は少ないですが、それ以前からある問題、たとえば十分な食べ物がないために起こる栄養失調や安全な水が手に入らないことによる下痢などは、引き続き健康・命を脅かす大きな問題となっています。もちろんコロナ感染の予防や治療は緊急性が高く、需要も高いことなのですが、命が脅かされるという意味ではラオスの実情も同じ状況なのです。それを“不急かもしれない。でも不要ではない”という言葉で表現して呼びかけました。

この呼びかけにたくさんの方が賛同してくださり、毎回のことですが、言葉では表せないほどの感謝と感激で胸がいっぱいになりました。LFHCはとても小さい病院です。ですから、できることはもちろん限られてはいますが、その中でも、できる限り一人でも多くの子供たちが笑顔で暮らせるよう、日々努力を続けていこうと思います。皆様のご厚意を決して無駄にはいたしません。ありがとうございます！

ラオスから
カウントダウン
してくれた
ジャイディ
です。

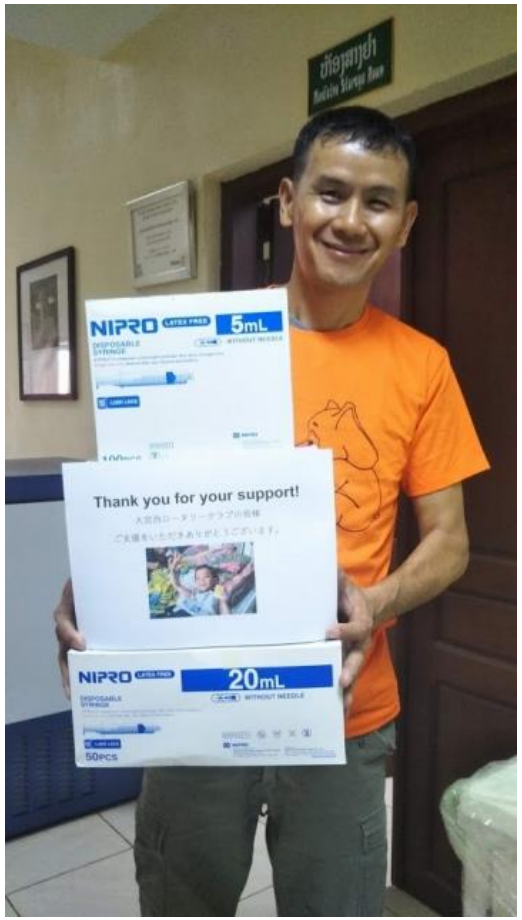
Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

5周年記念式典

今年はコロナの騒動が頭を占領してしまい、ラオ・フレンズ小児病院(LFHC)の記念すべき5周年記念のことがすっかり遠い昔のように感じられます。
こじんまりとした式典でしたが、恒例の子供カーニバルは開催しましたので、たくさんの子供たちに楽しんでもらうことができました。ちょうど式典の後くらいから、コロナによりとても大変な状況となりましたが、しかしそれは、必ずしもネガティブなことばかりではなかったと思います。転んでもただでは起きないのがフレンズです!
LFHCはもうじき丸6年を迎え、7年目へのスタートとなります。どんな年になるでしょうか。きっと何か良いことがまたあるはずです。
今はみんなが集まってお祝いすることができませんが、ハグして、大声で笑って、1年の成果をみんなで祝える日はもうそこまで来ていると信じています。

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

たくさんのご寄贈品も



色々な方々から、毎年たくさんのご寄贈品をいただきます。毎日必ず使う注射器、タオル、木琴、輪投げなどのおもちゃ等々。皆さんが「ラオスの子は何が欲しいかな？」「病院で必要な物はないかな？」と頭を悩ませ、色々な形でのサポートを考えてくださることが、とても嬉しいです。
世界中の誰もが大変な1年であったにもかかわらず、ラオスの子供たちのことを忘れずにいてくださり、感謝の気持ちでいっぱいです。
改めて、ありがとうございます！

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

モン族のお正月

ラオスには50余りの違う民族の人びとが住んでいます。病院の中にもモン族、カム族、ラオ族、ラオルム族などのスタッフがいて、私たち外国人には、それぞれの文化を知るチャンスにもなっています。民族が違うとお正月も違う時期にお祝いすることがあります。カム族は1月下旬、ラオ族は4月中旬、そして、モン族は12月中旬です。そしてとってもびっくりするのが、昨年もお伝えしたモン族のお正月の風物詩、お餅つきですね。もち米を蒸して、木製の臼へ入れて（写真左）、杵を持ったつき手が2人で交代でぺったんぺったん！（写真中央）そして、十分つけたら、女性がわーっと集まってきて手にゆで卵の黄身を付けて丸めていきます。丸めた後は、バナナの葉っぱでギューッと抑えて（写真右）保存します。写真は赤米でやっていますが、この前に白いもち米でも既に餅がつかれていました。つきたてのホカホカを私もいただきました！サトウキビ砂糖をとろとろにしたものを付けて、いくらでも食べられてしまう恐ろしくおいしいお餅でした。長期保存できるので、卵を付けて揚げたり、そのまま焼いたりしていただきます。民族が違っても、国が違っても、お正月は特別な時ですね。そして、一つの区切りになる気がします。

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.

今年の出来事は1回のみの発行となってしまいましたが、ここに掲載した出来事はほんの一部です。もっともっとお伝えしたいことがありますが、また次の機会にとっておきたいと思います。これを書きながら色々な思いがめぐりました。あまり明るいニュースとして伝わることのないコロナ感染ですが、私たちにたくさんの初めてを経験させてくれました。その中でも、この事態がきっかけとなりラオス人スタッフの成長が後押しされる形になったことは、とても喜ばしい事でした。完全な自立にはまだ時間がかかりますが、大きな一歩を二歩、三歩と歩み進められるように、これからもサポートしていきたいと思います。
今年は世界中から笑顔が減ってしまい、豊かなはずの地球が固く縮んじゃったような気がしました。そして人々の心も縮まっちゃったのか、あちらこちらでギスギスとしたコミュニケーションの滞りがあったように感じます。ここらでその滞りをすっきりしないと！日々前にしか進めないのですから、笑顔でいなけりゃもったいない！
2021年もこの精神で頑張りたいと思いますので、引き続きどうぞよろしくお願いいたします！
最後は訪問看護中に出会った水牛さんの水浴びの写真で、皆さんにも癒しを。

ラオ・フレンズ小児病院　看護師　赤尾和美

Copyright © 2020 Friends Without A Border. All rights reserved.